“ 山笑う ”　悠久の歴史と日本人の感性

「山笑う」とは、俳句における春の季語です。元は、中国の王朝である北宋の時代の画家であった郭熙の言葉です。春になると木々は芽吹き、山全体が徐々に明るい様子になることを言います。山に生息する様々な動植物は、春になると生き生きと活動を始めます。一斉に花を咲かせ、鳥たちもさえずります。静まり返っていた冬の山に比べ、明るくのどかな雰囲気に包まれるのです。

この「山笑う」は、まるで山が笑ったかのように、本格的に春が訪れる前兆として使われます。しかし、「山笑う」という比喩的な表現は、外国人どころか日本人でさえも理解していません。日本語は世界に数ある言語の中でも、複雑で習得が難しいと言われています。また、漢字には「音読み」と「訓読み」があり、同じ読み方でも「橋」と「箸」など、アクセントで全く意味が異なってきます。このように様々な文字によって構成される日本語は、難しいだけでなく、表現豊かな言語でもあります。例えば、擬音語です。雨の降り具合を「パラパラ」と言えば小雨ですが、「ザーザー」と表現される場合は、土砂降りをイメージできます。日本語は、悠久の歴史と日本人の感性によって育まれた文化の結晶に他なりません。時には辞書を引くなどして、その意味を深く学びたいものです。

春の『お彼岸』

もうすぐ、春のお彼岸の中日で「春分の日」です。この前後にお墓参りに行く人も多いのではないでしょうか。お彼岸は一年に２回、春と秋にあります。「秋分の日」「秋分の日」が、お彼岸の中日にあたります。中日をはさんだ前後約３日ずつの１週間を「お彼岸」と言い、先祖を供養し、故人を偲んできました。春分の日は昼夜の長さが同じで太陽が真西に沈むため、仏教で西方遥か彼方にあると言われる極楽浄土にちなんで、この日に仏事をするようになりました。また、国民の祝日である「春分の日」は、「自然をたたえ、生物をいつくしむ」と示されています。戸外に足を運び、鳥のさえずりに耳を傾けたり、春を彩る花に目を向けたりして、四季の移り変わりを楽しみましょう。日が延び、日ごとに暖かくなっておくことに胸を弾ませながら、温かく豊かな心で生活していきたいものですね。